

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：10107

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K15824

研究課題名(和文) がん看護高度実践看護師における日本版実践コンピテンシーモデル開発

研究課題名(英文) Development of Japanese Version of Practical Competency Model for Advanced Nurse Practitioners in Oncology

研究代表者

濱田 珠美 (Hamada, Tamami)

旭川医科大学・医学部・教授

研究者番号：00374273

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：がん看護専門看護師(Oncology Certified Nurse Specialist: OCNS)を目指す学生の“実践”コンピテンシーが強化する経験の可視化に試み、教育評価に役立つRubric開発とOCNSにおける日本版“実践”コンピテンシーモデル開発を目指した。欧米で開発のRubricに基づき、高度実践力形成をコミュニケーションできる日本型がん看護高度実践Rubricを開発し、“実践”焦点化日本型がん看護高度実践コンピテンシーモデルを開発した。シミュレーション下高度実践力形成に際し、コミュニケーションを促進できるが、臨床特異項目の拡充と計量的ツールとしての信頼性検証に課題が残った。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to develop a Rubric which is useful to evaluate education results and a Japanese version of the “practical” competency model for Oncology Certified Nurse Specialist (OCNS) by visualizing the learning experience strengthened by the “practical” competence of students aiming to be qualified as OCNS. We developed a Japanese version of the Rubric to practice advanced cancer nursing that will enable communication to develop advanced practical skills based on the Clinical Judgment Rubric under the simulation. The simulation showed that the model can be utilized for promoting communication in forming advanced practical skills, but there remains challenges to improve question items that measures situations unique to clinical settings, and verify the reliability and validity for assigning scale values.

研究分野：がん看護学

キーワード：高度実践 がん看護専門看護師 実践コンピテンシー シミュレーション 高度実践看護師 ルーブリック 臨床判断

1. 研究開始当初の背景

今日、514名(2014)のがんCNSを有し、新たにNurse practitioner (NP)を含むANP育成拡充への平成30年までの道筋が提示され、米国Hamricらのコアコンピテンシーに基づく、日本の医療事情を反映した“実践”を「コア」とする、教育、倫理調整、調整、研究、コンサルテーションの6機能を包含する概念図が提案された¹⁾。また、米国等のANPコンピテンシーとの機能・役割比較から、“実践”の内容とその強化課題が浮彫になった²⁾。すでに、米国ANP大学院教育では、可視化困難で状況特異でなされる“実践”コンピテンシーの有効強化には不可欠とし、状況を安全に再現し繰り返しシミュレーション教育開発と学生・教育者相互のコミュニケーション促進・評価に役立つEvidence-basedのツール(Assessment Rubric)開発がされた³⁾。Rubricとは、タスクまたは研究課題として期待される事柄の詳細の描写である³⁾。しかし、日本のがん看護学において、大学院教育ANP“実践”コンピテンシー強化・評価に役立つアセスメントツールさえ未開発である。すなわち、複雑なヘルスニーズを持つがん患者・家族のケアに臨床が要請するがんCNS“実践”コンピテンシー強化は、繰り返し得ない臨床場面を再現するシミュレーション教育とその評価ツールなしには「八方塞がり」の危機に陥ると示唆される。したがって、Evidence-based“実践”コンピテンシーアセスメントRubric開発の実用的・効率的促進とそれに基づく日本版がんCNS“実践”コンピテンシーモデル作成の今日からの挑戦的牽引は、喫緊の課題である。こうした背景に、本研究は、次の3つの斬新性を持ち挑戦的に取り組む。1. 先行実施するPittsburgh University高機能シミュレーター演習システムにより集積したノウハウによる看護ヘルスアセスメントシミュレーション演習手法洗練。2. 規定し難い臨床状況(がん化学療法療養場面：好中球減少症がん患者・家族のシナリオ)規定下の“実践”コンピテンシー強化実態への信頼性高いデータ集積。3. 1.2に基づく、アセスメントツールとシミュレーション教育標準シナリオ装備によるANP基盤教育プログラム開発への先駆である。また、次の3つのチャレンジ性を持つ。臨床で捉え難い実践パフォーマンスに対し、1. 既存のシミュレーションラボと高機能シミュレーターを活用する低コスト大学資源最大化。2. 汎用化を視野に入れ“実践”コンピテンシー強化・評価するANP大学院教育に役立つパフォーマンスレベル明記のアセスメントRubric(仮)開発。3. がんCNSと協働し、がんCNS共通の“実践”コンピテンシー可視化が切り拓く(下図)、アセスメントRubric(仮)を有機的最大限度活用するANP養成基盤科目：看護ヘルスアセスメント科目に標準シミュレーションプログラムを開発することに挑戦する。

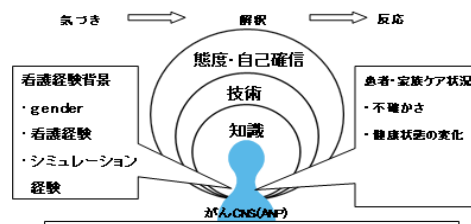


図 がんCNS“実践”コンピテンシー強化概念枠組み

日本は、がん罹患数75万人(2008)：がんCNS：514人に比し、米国：同152万人：ANP15万人(2010)とANP拡充が国のヘルスニーズである。彼らの“実践”コンピテンシーが強化される学習経験の可視化を資源とし、がんCNSと日米教育者との有機的最大限度活用に着目した系統的展開によって、役立つアセスメントツールを来る拡充時代に向け装備し、強化の促進を今日から挑戦的に牽引する点で独創的であり、優先される“実践”に焦点化したがんCNSコンピテンシーモデル開発によって、その養成基盤科目に標準化シナリオの波及を高める点で意義がある。

2. 研究の目的

本研究は、来るがん看護専門看護師(以下、がんCNS)・NPの高度実践看護師(Advanced Nurse Practitioners：ANP)育成拡充時代に備え、再現困難ながん患者・家族の看護場面を再現するシミュレーション看護ヘルスアセスメント教育を実施し、がんCNSを目指す院生の“実践”コンピテンシーが強化する学習経験の可視化に試み、精度高いシステムティックレビューと統合し、このコンピテンシー教育評価に役立つCNSコンピテンシーアセスメントRubricを開発する。次に、協働するがんCNSネットワーク下でレビューし、“実践”コンピテンシーを精度高く吟味する。以上を成果とし、組織的・系統的にシミュレーション教育とコンピテンシー強化に参加する日米ANP・教育者パネル検討で際立たせた日本版がんCNS“実践”コンピテンシーモデル構築を3年間で挑戦的に目指す。

(1) 本研究の目的は、第1段階(平成27年度)：先行する看護ヘルスアセスメント(シミュレーション場面)教育時の、がんCNS院生の“実践”コンピテンシーが強化する学習経験を記述し、基礎的要素を識別する。

第2段階(平成28年度)：がんCNS・がん看護教育者パネルによるがん看護場面におけるANPの“実践”コンピテンシーエビデンス(内容・成果・課題)に焦点化したシステムティックレビューを行い、結果を統合し、アセスメントRubric(案)を吟味し実用性を評価する。

第3段階(平成29年度)：前半；協働また関心あるがんCNSの看護ヘルスアセスメント(シミュレーション：H27共通シナリオ場面)による、Rubric使用データ集積(N=30予定)し、因子分析・クラスター分析などにより精度高く識別。後半；以上を成果とし、組織的・系統的に日米ANP・ANP教育者パネルの検討

により際立たせた日本版がん CNS “実践” コンピテンシーモデルを構築する。

3. 研究の方法

(1) 【第1段階（平成27年度）】看護ヘルスアセスメント（シミュレーション場面）教育（大学院1年次後期）時のシナリオ（好中球減少症の進行肺がん患者・家族）下で、がん CNS 院生（N=5 予定）の“実践”コンピテンシーが強化する学習経験を記述し、内容分析を行い、基礎的要素を識別する。

(2) ①対象者の選定

がん CNS を目指す旭川医科大学大学院高度実践コース1年次後期に開講するがん看護学演習Ⅱ受講、また、受講した大学院生（1年次5名予定）に協力依頼予定とする。

2. データ収集と分析

【対象】がん看護学演習Ⅱを受講大学院生計5名（N=5 予定）

【条件】高度実践コースに在籍し、基盤科目と1年次前期科目を既習した1年次後期開講のがん看護学演習Ⅱを受講し、口頭と紙面で研究目的の説明を受け、同意文書に署名または、提出を持って同意した院生。

【方法】先行する好中球減少症進行肺がん患者と家族の療養場面シナリオ（家族役：研究分担者、医師役：非常勤講師（Pittsburgh University ヘルスアセスメント修了 重症・救急 CNS）、代表研究者がシミュレーターを操作分担）において、学生の看護ヘルスアセスメント“実践”コンピテンシー強化場面をビデオテープと IC レコーダーで記録。その前後でフィジカルエグザムに関する講義内容に基づく、事前学習知識テスト（30 問）、技術・態度・self confidence 評価自記式アンケート（回答 30 分程度）。映像記録、ディブリーフィング時 IC レコーダーの音声データを逐語録とし、内容分析 1) する。得たデータは、Excel 表にまとめ、因子分析 2) を、SPSS20.0, AMOS20.0 で解析。また、分析時に必要ながん看護経験年数などの背景データは、回答を受け収集する。

【倫理的配慮】人権の保護及び法令等の遵守への対応事項を行う。

(2) 【第2段階（平成28年度）】

がん CNS・がん看護教育者パネルによるがん看護場面における APN の“実践”コンピテンシーエビデンス（内容・課題）に焦点化したシステムティックレビューを行い、結果を統合し、数量化アセスメント Rubric（案）を吟味し、実用性を評価する。

① 文献収集方法：高度実践者のコンピテンシーに関する文献を包括するため、例えば (a) 「Advanced Nursing practice」(b) 「Oncology」群、(c) 「Competency」群、(d) 「Rubric」群との演算式を作成し、Pubmed, CHINAL, 医学中央雑誌の各検索エンジンにて文献を網羅的に検索する。収集された文献は、「高度看護実践」関連文献と

「Rubric」関連文献を精選し、文献ソフトで管理する。②分析・吟味方法：これらを批判的に吟味対象とし、Outcome モデルにリスト化することによって、要因、プロセス、アウトカム毎の文献収集範囲を評価し、がん看護 CNS 3 名、研究代表者、分担者によるグループを形成し、エビデンスの確認とそれに基づく推奨内容の決定について、コンセンサスを得る。これらを踏まえて『がん CNS “実践”コンピテンシーアセスメント Rubric（案）』を作成する。

(3) 【第3段階（平成29年度）】

①これまでに吟味された成果から作成したがん CNS “実践”コンピテンシーアセスメント Rubric（原案）を協働がん看護 CNS 経験差（3年目と5年目、10年目各3名）における適用評価時の、内容、評価の一貫性について、看護経験年数などの看護背景条件、活躍の施設環境などの影響を含め、看護研究者と協働がん CNS で吟味し、課題を検討する。

これまでの第1～3段階までの成果を批判・吟味し、協働日米がん CNS と NP から得た Peer レビューを組み入れ際立たせる。実用性、有効性を重視したデザインでの講義と適用、汎用化を念頭に入れ拡張性を考慮した標準化シナリオ・シミュレーションプログラム運用方法の示唆を得る。

4. 研究成果

(1) 27 年度：研究目的は、看護ヘルスアセスメント（シミュレーション場面）教育時のシナリオ（好中球減少症の進行肺がん患者・家族）下で、がん看護専門看護師を目指す大学院生の”実践”コンピテンシーが強化する学習経験を記述し、内容分析を行い、基礎的要素を識別することである。研究協力の得られた計3名の、看護ヘルスアセスメント教育時のシナリオに基づく、シミュレーション後、ディブリーフィング時の音声記録データを内容分析した。

結果、研究協力者3名（男性33.3%）は、看護師経験年数平均9年（SD=4.4）、がん看護経験年数平均6.7年（SD=0.58）であった。シミュレーション経験者は2名であった。ディブリーフィング時間は概ね30分であった。主要要素として、【アセスメント】【リーダーシップ】【チームワーキング】【コミュニケーション】などが抽出された。【アセスメント】では<アセスメントシートを頭で組み立てる><感染リスク判断のため、情報を取りに行く>など【リーダーシップ】を含む要素が含まれた。【チームワーキング】では<医師の判断に活用を促す情報提供>など、【コミュニケーション】では<不安を緩和するための患者・家族とのコミュニケーション>などが含まれた。

好中球減少症の進行肺がん患者・家族への看護実践という状況下において、がん看護専門看護師を目指す大学院生の“実践”コンピテンシーが強化する学習経験では、【チーム

ワーキング】に不全さを感じていた。つまり、その促進には<医師の判断に活用を促す情報提供>が、自信を持ってできる【自己確信】が必要であると考えられた。そのために、【リーダーシップ】を発揮し、【アセスメント】ができることが重要ではないかと考えられた。以上から、高度実践コンピテンシーの強化は、コンピテンシーとしての高度な知識を引き寄せて情報を分析し、各要素を活用できる技術の関連を踏まえた強化が必要ではないかと考えられた。

(2) H28 年度：研究目的は、看護ヘルスアセスメント（シミュレーション場面）教育時のシナリオ（好中球減少症の進行肺がん患者・家族）下で、高度実践コース在籍のがん看護専門看護師を目指す大学院生の”実践”コンピテンシーが強化する学習経験の記述に基づくデータを内容分析して得られた前年度知見に基づく、がん看護高度実践コンピテンシーの内容を洗練し、日本型がん看護高度実践 Rubric の内容（試案）を考案することである。

結果、前年度見出された主な要素としての【アセスメント】は、<情報に基づき判断を裏付ける>が加えられた。【チームワーキング】では、医師の判断に活用を促す情報提供について、<アセスメントができずに事実を伝えていた>ので、<アセスメント情報と判断を伝える>ことができず、<状態がわからないという自信のなさ>につながっている新たな局面が見いだされるなど洗練を図った。一方、先行研究レビュー結果に基づき、米国で開発された学部学生が修得を期待される実践力の評価実績を持つシミュレーション学習環境下で使用される臨床実践能力に関する Clinical Judgment Rubric の枠組み³⁾を参考として、日本型がん看護高度実践 Rubric（試案）を作成した。

これらから、シナリオ（好中球減少症の進行肺がん患者・家族）教材としては、医師の判断につながる情報提供をするために感染の判断につなげる情報付加が必要と示唆された。平成 29 年度の研究課題進捗を進める課題として、看護ヘルスアセスメント教育時、がん看護高度実践コンピテンシーとして見出された本研究結果には、日本のがん看護専門看護師などによる吟味を加えて、がん看護専門看護師を目指す大学院生の修了時点までに求められるコンピテンシーまでに強化する学習に活用できる Rubric として試案を洗練し、実用性を評価することである。

(3) 平成 29 年度：研究目的は、前半に看護ヘルスアセスメント教育時、がん看護高度実践コンピテンシーとして見出された本研究結果には、日本のがん看護 CNS などによる吟味を加えて、がん看護専門看護師を目指す大学院生の修了時点までに求められるコンピテンシーまでに強化する学習に活用できる日

本型がん看護高度実践 Rubric（試案）を洗練し、実用性を評価することを進めた。後半は組織的・系統的に日本 ANP/ANP 教育者パネルの検討により際立たせた日本版がん CNS “実践”コンピテンシーモデルを構築することである。

結果、米国で開発された学部学生が修得を期待される実践力の評価実績を持つシミュレーション学習環境下で使用される臨床実践能力に関する Rubric³⁾を参考として、高度実践者（がん看護専門看護師 3 人、教員 1 名）の評価を受け、日本型がん看護高度実践 Rubric（案）はシミュレーション下でのがん看護専門看護師を目指す学生の高度実践力の形成評価に対し、標準的言語によるコミュニケーションに活用できる日本型がん看護高度実践 Rubric としての実用性があると示唆された。一方、がん看護専門看護師を目指す高度実践コースの大学院生の高度実践力形成評価が期待される臨床状況（シミュレーション）は複数に及ぶ。そこで、この日本側協働がん看護 CNS 経験差（3 年目と 5 年目、10 年目各 3 名）においての吟味は、具体的な臨床状況特異の Rubric 項目の実践力をコミュニケーションできる項目内容の拡充が必要と判断されたが、Rubric 各項目は実践内容を包括する言語表現にする必要の反面で難解な言語表現となることとの表裏一体となることで、理解と吟味に時間を相当要した。そのため、米国 NP からの Peer レビューを組み入れ際立たせる吟味は継続課題とした。今後には、形成能力を計量できるツールとしての信頼性と妥当性の検証へと進めていくことが課題⁶⁾として残った。

<引用文献>

1. 日本学術会議 健康・生活科学委員会看護学分科会 (2011)：高度実践看護師制度の確立に向けて-グローバルスタンダードからの提言、1-21. 5. 主な発表論文等
2. 日本看護系大学協議会高度実践看護師制度推進委員会 (2008)：高度実践看護師養成の教育課程に関する提案、1-17.
3. Lasater K : Clinical judgment development: using simulation to create an assessment rubric, J Nur Edu, 2007, 46: 496-503.
4. Victor-Chmil J, Larew C : Pshychometric Properties of the Lasater Clinical Judgment Rubric, International J Nur Edu Scho, 2013
5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

〔学会発表〕（計 3 件）

- ① 濱田 珠美、高度実践コースにおける看護ヘルスアセスメント能力育成を目指したシミュレーション教育の試み、日本看護学教育学会第 24 回学術集会、2014 年 8 月 26-27 日、千葉県。
- ② 濱田 珠美、石川 洋子、高度実践コースにおける看護ヘルスアセスメント能力育成のためのシミュレーション教材の効果と評価、日本看護学教育学会第 26 回学術集会、2016 年 8 月 21 日、東京都。
- ③ 濱田 珠美、石川 洋子、大学院高度実践コースにおける看護ヘルスアセスメント能力育成を目指したシミュレーション学習方略の効果、第 13 回日本医学シミュレーション学会、2018 年 2 月 10 日、静岡県

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

濱田 珠美 (HAMADA, Tamami)
旭川医科大学・医学部・教授
研究者番号：00374273

(2) 研究分担者

石川 洋子 (ISHIKAWA, Hiroko)
旭川医科大学・医学部・特任准教授
研究者番号：30550660